

福島菊次郎さん

(報道写真家・作家)

際限なき嘘っぱち

爆雷を抱え浜辺のタコツボに入った状態で迎えた終戦。一九六〇〜七〇年代には、状況を問う報道写真を世に送り続けた。常に時の政治権力と対峙する姿勢を崩さず、今年九十四歳を迎えた福島菊次郎さんの原点とは何か。

思想ではなく怨念

——昨年末、東京・多摩市で講演「93歳のラストメッセージ」が行なわれ、これまで作成した全パネルが初めて展示されましたね。

総合雑誌に発表した三千点ほどの写真を元に作ったパネルです。パネルの巡回展は、一九八九年以降、小さな市民団体などが展示会を開いてくれ、「写真で見る戦争責任展」と題して百六十カ所くらい回ったでしょう。展示内容に反対する者から、パネルを切られたり、

たり、液体をかけられたり、ピストルまで撃ち込まれたりもしました。主催団体には、「怖ければタイトルを変えなさい」と言っています。

僕の天皇制への反対は思想ではない。それは怨念です。戦前日本の最高責任者であり、かつ陸海軍の大元帥であったのが昭和天皇です。それに対し、僕はその末端の末端にいた。おまけに、軍人扱いさえされない輜重兵で、最終的に宮崎の海岸で穴を掘られ、爆雷抱えて、その中で上陸する米軍を迎え撃つという、使い捨ての扱いでした。同級生の六割が軍隊にとられて、戦争で死んだ。

僕がガンになって入院中、昭和天皇の下血報道があられたのですが、ベッドに横たわりながら、天皇の戦争責任を考えました。で、退院後、「トンズラされてたまるか」とパネルを作ったんです。

——写真家として活躍後、瀬戸内海の島に移住しました。



●ふくしま・きくじろう 1921(大正10)年、山口県生まれ。広島原爆を6日違いで逃れ、米軍上陸を想定した宮崎・日南海岸のタコツボで爆雷を抱えて敗戦を迎える。61年に出版した『ピカドン ある原爆被災者の記録』が、日本写真評論家協会賞特別賞を受賞。60〜70年代には報道カメラマンとして、三里塚闘争、学生運動、自衛隊と兵器産業、公害問題、若者の風俗などを『文藝春秋』『中央公論』『朝日ジャーナル』などに発表。82年から18年間瀬戸内海の無人島などに住む。「汚い国からお金もらって飯なんか食いたくない」と年金は受け取っていない。写真は故郷、山口県柳井の海で

還暦を機に、お金と関係のない自給自足の生活を確立しようとしたんです。世の中、金とモノばかりありがたがるという時代になってしまっただけで、その風潮に抵抗して東京を捨てたんです。それが片山島(山口県)に行った理由です。漁師の子でしたが、島は瀬戸内海の真ん中で、何にもないけど、強烈な台風はやってくる。すぐ近くの周防大島にも一軒家を借りていて、台風のとときには大島に逃げる。相当悲壮感がありました。そこで嵐にうたれて最期を遂げる——それを期待していたのです。結局、片山島に五年、周防大島の下田に十三年、計十八年島で暮らしました。

島を出たとき、応援してくれたグループが一口一万円の募金をやってくれて、下関に僕の資料館を作ろうとなったけど、事務局長だった人とそりが合わず、その後、柳井に宿泊場所の施設の期限付きで紹介されて資料館としました。

柳井で一年半やったところで、八十二歳。年齢的に資料館の運営が少し無理になって閉館しました。それから著述活動です。結局、三冊(『写らなかつた戦後』シリーズ)書くのに三年くらいかかった。そして九十歳近くになって、今度は僕の下キメメンタリー映画(『三ツ